



京都大学こころの未来研究センター
上廣ころ学研究部門 2014 年度研究報告会
「学びの経験と社会」

2014 年 12 月 21 日(日)14:30~17:30

稲盛財団記念館 3 階大会議室

プログラム

- 14:30 - 14:35 センター長挨拶
吉川左紀子(こころの未来研究センター教授・センター長)
- 14:35 - 14:40 来賓ご挨拶
丸山登(公益財団法人 上廣倫理財団 事務局長)
- 14:40 - 14:50 上廣こころ学研究部門の取組紹介
河合俊雄(こころの未来研究センター教授・上廣こころ学研究部門兼任)
- 14:50 - 15:20 研究報告①
「学び合いから生まれる新たな価値と力 -孤立防止のための互助・自助強化プログラム開発研究より」
清家理(こころの未来研究センター上廣こころ学研究部門 特定助教)
- 15:20 - 15:50 研究報告②
「身体的経験を通じた学びの豊かさ -淡路人形座における稽古場面より」
奥井遼(こころの未来研究センター上廣こころ学研究部門 特定研究員)
- 15:50 - 16:20 研究報告③
「嘘つきはより嘘つきに -繰り返される誘惑には抗えないのか？」
阿部修士(こころの未来研究センター上廣こころ学研究部門 特定准教授)
- 16:20 - 16:40 -休憩(質問用紙回収)-
- 16:40 - 17:25 部門研究者による全体討論
モデレーター:鎌田東二(こころの未来研究センター教授・上廣こころ学研究部門兼任)
コメンテーター:熊谷誠慈(こころの未来研究センター上廣こころ学研究部門 特定准教授)
畑中千紘(こころの未来研究センター上廣こころ学研究部門 特定助教)
福島慎太郎(こころの未来研究センター上廣こころ学研究部門 非常勤研究員)
梅村高太郎(こころの未来研究センター上廣こころ学研究部門 非常勤研究員)
- 17:25 - 17:30 閉会の挨拶
カール・ベッカー(こころの未来研究センター教授・上廣こころ学研究部門兼任)

研究報告①

「学び合いから生まれる新たな価値と力 -孤立防止のための互助・自助強化プログラム開発研究より」

上廣こころ学研究部門・特定助教 清家理

超高齢社会の加速化と相まって、介護問題（老老介護・認認介護）、孤独死の増加が社会問題となっている。その中で、増加の一途をたどる高齢者に対し、支援される対象から社会に貢献する対象への転換が求められている。しかし実際は、地域での居場所がない、または他者とのコミュニケーション機会が少ない高齢者が多く、抑うつ等の精神疾患、自殺や孤独死が増加している。そのため、閉じこもりや要介護状態に陥ることを防ぎ、地域での居場所を作る「仕掛けと仕組み」が必要である。この「仕掛けと仕組み」のキーワードが、「教育」である。そして、教育の仕掛けとして、地域住民同士が、健やかに老いていくための知恵や方法を学び合い、自らのため、周囲の他人のために使える知識や力にしていくことをねらいとした生涯学習プログラムが挙げられる。以上の考えに基づき、演者たちプロジェクトチームは、今秋より「くらしの学び庵」を試行的に開始した。

今回は、老老介護・認認介護・単身者のがん終末期、以上3つの事例をもとに、高齢者が地域で取り残されている実態と解決策としての教育実践を紹介する。しかし、特定の疾患に関連する者を対象とした集団教育、個別教育等、限定した教育環境での実践は、地域社会との乖離を埋め合わせるものではなかった。これらの事例から浮かび上がった課題を解決すべく、今秋から開始した、くらしの学び庵であるが、学びあいを通じて生まれているもの、今後の展望から、学びあいによる可能性について述べていく。

研究報告②

「身体的経験を通じた学びの豊かさ -淡路人形座における稽古場面より」

上廣こころ学研究部門・特定研究員 奥井遼

本発表では、淡路人形座の稽古場面におけるフィールドデータをふまえて、師匠と弟子との生きた身体のやり取りを記述していく。淡路人形座とは、遅くとも16世紀中頃までに成立した人形芝居の座元を由来とする、人形浄瑠璃の一座である。

稽古場面の記述に当たって、本発表では、当事者たちが交わし合う発話だけではなく、身ぶりや手ぶりを含めたやり取りの全体に注目する。人形遣いたちの稽古は、他の伝統芸能の稽古と同じく、「振り」の厳格な規範を徹底的に遵守するもので、師匠から弟子への一方向的な伝授から成り立っている。しかしながら、その教示を成り立たせるための身体的なやり取りは、極めて豊かに相方向的に、かつ暗黙的に形成されている。身体が雄弁に語ってみせたり、背景化したり焦点化したり、やり取りの中から共同的に意味が生まれるという出来事は、わが研究にとって重要な発見であると同時に、私たちの身体の働きもまた、かくも豊かなものであったかと驚きをもたらせてくれることになるだろう。

そうした身体の働きは、「心豊か」に生きるための教育を模索し、教え手と学び手との双方が、学びを通じて変容し合うような共同作業を構想するという、教育学における大きな挑戦に向けた小さな端緒となるのである。

研究報告③

「嘘つきはより嘘つきに -繰り返される誘惑には抗えないのか？」

上廣こころ学研究部門・特定准教授 阿部修士

「オオカミ少年」の例が示唆するように、ヒトは嘘をつき続けると、いずれ本当のことを言っても信じてもらえなくなる。日頃から正直に生活することが大切であることに異論の余地はないだろうが、それでも私達が時として嘘をついてしまうのは、嘘をつくことで利益を得られるという「誘惑」が存在するからである。

本研究報告では、繰り返し嘘をついて利益を得られる状況に直面すると、正直者は正直者のままである一方、嘘つきはより嘘つきになってしまうことを示す心理実験の成果を報告する。この知見を、これまでの心理学の研究で明らかにされている「どうにでもなれ効果」の枠組みで議論する。「どうにでもなれ効果」とは、一度自分の決めたルールを破ってしまった場合に、雪だるま式にルール破りが繰り返されてしまう現象であり、本研究における成果を“道徳版”「どうにでもなれ効果」として考察する。このように、繰り返しの経験が負の側面を持つ状況において、どのようなストラテジーを取ることで誘惑に打ち勝ち、また社会に適応できるのかを提案し、議論を深めたい。